

問い：世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会を終えたいま、私たちは今後さらに「共に歩む神の民」としてシノダリティを「希望の巡礼者」らしく生きるよう招かれている。ミサの中の「交わりの儀」はこのような私たちにとって、どのような意味を持つのか？

⇒「キリストの体」をいただくことによって、共同体全体が「キリストの体」になっていくという喜びについて見ていきましょう！

（※フランス人イエズス会神学者アンリ・ド・リュバックの有名な言葉「教会はエウカリスティアを行うが、同時にエウカリスティアが教会を形作る。」）

交わりの儀

ミサ自体が、神さまと交わり、そして神さまに呼び集められた私たちが交わる喜びの食卓の祝い。特に奉獻文の後の「交わりの儀」（「主の祈り」から「拝領祈願」まで）は、信仰の家族としての喜びを表現する言葉や仕草がいっばいつまっている、夢きらめく宝箱のよう。

⇒初代教会ではあまり多くの儀式的動作は行わずに、すぐに聖体を拝領していた。しかし聖体における「交わり」の神秘を深めるために、個人または共同体の準備として「交わりの儀」が4世紀ごろから発展していく。

①【主の祈りと副文】

◇招きの言葉の一例として「つつしんで主の祈りを唱えましょう」とあるが、ラテン語では「*audemus dicere*」、すなわち（本当は恐れ多いことだけど勇気をもって）「あえて唱えましょう！」の意味。

⇒何がそんなに勇気が要るのか？

- ・神を父と呼ぶこと。
- ・そしてもしかすると、神を「私たちの」父と呼ぶことによって、私たちが兄弟姉妹になることも。

◇「神の国」に向かって歩む私たちを支える日ごとの糧としての聖体。そして聖体に養われて、神によるゆるしのうちに互いにゆるし合い、誘惑と悪からの解放を願いながら神に寄りすぎる私たち。

◇「悪からの解放」というモチーフは、その後の副文において展開される。

⇒切り離すことのできない「人間の内面的な平和」も「世界全体の平和」も、主の来臨による神の国の完成において完全に実現するものでありながら、すでに私たちの教会のとしての歩みの中で実現しつつあるという希望を表現する。

⇒それが可能なのは、聖体においてキリストが私たちの交わりのうちに現存してくださるから。

②【平和のあいさつ】

◇「交わりの儀」の中でも、一番「兄弟との交わり」を意識できる動作。

⇒マタイ 5:23-24 の「あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい」に基づく。

⇒古代の多くの地域の典礼では文字通り「奉納の前」に行われた（＝共同祈願を完成させる「しるし」として?）。しかしローマ典礼では感謝の典礼の締めくくりとして、また教皇グレゴリウス一世の時に主の祈りが奉献文の後に挿入されてからは「ゆるし合い」の実践として、兄弟的な交わりを示す平和の接吻が「神との交わりである聖体拝領」に向けた準備となった。

◇聖体拝領の前に、兄弟的な平和の交わりを確認する意味

⇒第一コリント 11 章に描かれる、「貧富の差によって貧しい人が苦しみ、互いに分裂し合っていたコリント共同体」の実状。パウロはこれに対し「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです」と忠告する。

⇒「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになる」（一コリント 11:27）という考えは、後に聖体拝領者の内面的な準備と結び付けられ、ゆるしの秘跡の必要性の中で語られるようになった。それは大切なことであるが、本来は「共同体の中での分裂や貧しい人への思いやりの欠如」がパウロにとっての最大の関心事であった。

◇「わたしは平和を残し、わたしの平和をあなたがたに与える。」（ヨハネ 14:27）

⇒確かに共同体の平和は「神に祈るための前提」ではあるが、それは人間の力だけで成し遂げられるものではない。信徒がここで交わすのは「キリストの平和」。すなわち、復活したキリストに出会った時に弟子たちに恵みとして与えられ、教会の誕生の源となった、「神と人間の和解、人間同士の和解」。

⇒このように平和の恵みは「神に願うもの」ではあるが、人間がそれを受け入れる努力も必要。

⇒平和がキリストによって与えられる恵みであるというしるしとして、7 世紀ごろのローマ典礼では、①祭壇の奉仕者同士の接吻、②その後に会衆同士の接吻（教会堂は基本男女によって席が分かっていたため、基本的には同性同士のあいさつ）が行われた。すなわちキリストの聖体が置かれている祭壇から平和が広がっていくイメージ。（これは現代の「最初に司祭が会衆に挨拶し、それから会衆同士が挨拶する」という流れにもつながる。）

⇒中世においてある地域では、平和の接吻の前に司祭は祭壇に接吻したり、もしくは聖体に接吻したりしていた。すなわち、交わす平和は人間的な平和ではなく「キリストの平和」であるということ。

⇒時代が下っていくと、混乱を避けるためか、祭壇で奉仕している聖職者同士のみの挨拶に限定され、ついには荘厳ミサを除いて消えていき、ただ「平和が皆さんとともに」という言葉がだけ残る。

⇒第二バチカン公会議後の典礼改革において「平和のあいさつ」として再び実践される。

◇「主よ、わたしたちの罪ではなく、教会の信仰を顧み」

⇒本来はミサを司式している司祭が自分の罪を認め、ゆるしを願う祈り（アポロギア）。第二バチカン公会議後に「わたしの罪」から、共同体全員一人ひとりを示す「わたしたち」に変更。

⇒現代の教会では特に、シノダリティを考える時に大切な言葉。私たち一人ひとりには罪深くとも、神の家族・「神の忠実な民」である教会共同体全体の信仰に支えられ、そこに働く神によって導かれている。共同体で共に祈り生きることの喜び。「聖なるかたから油を注がれた信者の総体は、信仰において誤ることができない。」（第二バチカン公会議「教会憲章」12項）

③【パン裂き、杯への混和】

◇パン裂きは、キリストによる大切な動作、ミサの起源

⇒ユダヤ教の食事の儀式における家長の動作。神に感謝を捧げたのち、裂いたパンを通して家族のメンバーが神の祝福を受けてひとつになることを願う。

⇒イエスが最後の晩餐においてパンを裂き、ご自分の体として与えたことがミサの起源。ミサの最古の呼び名も「パン裂き」であった（使徒言行録 2:46）。エマオに向かう弟子たちも、復活したイエスがパンを裂いた瞬間に、それがイエスだと分かった（ルカ 24:30-31）。

⇒「いのちのパン」である裂かれた聖体をとにもいただくことが、神の家族・キリストの体としての教会が一致し、キリストのいのちによって共に生かされるために必要不可欠なこと。

「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」（一コリント 10:16-17）

⇒同時に、典礼神学の歴史の中で（特に 6 世紀ごろから）、パン裂きが「キリストの死の瞬間」の記念と結び付けられていく。教会は民族を超えて、キリストの十字架によって和解し一致した体である（エフェソ 2:14-17）。

◇「世の罪を取り除く神の小羊…」（Agnus Dei）

⇒7 世紀ごろにおそらくシリアからローマ典礼にもたらされた。（今でも多くの東方教会では、聖変化に用いられるパンを「子羊のパン」と呼ぶ習慣がある。）当初は、パンを裂くあいだ何回も唱えられていた。

⇒10 世紀、特に 11 世紀から、最後に「平和をわたしたちに」と唱えるようになった。教皇インノケンティウス 3 世によればそれは、社会そして教会がさまざまな逆境や恐怖および戦争を体験したため、平和を願う必要があったから（*De sacro altaris mysterio*, VI, 4: PL217, 908D）。

◇裂いた聖体の一部を杯へ混和

⇒キリストの御体と御血がひとつであるように、キリストと私たち、またキリストにおいて教会がひとつとなって、永遠の命に導かれるように祈る。

⇒パン裂きがキリストの死の瞬間の記憶であるなら、中世においては杯への聖体の混和が主の復活と結び付けられた。それはさらに、「あなたがたに平和があるように」と告げる復活の主との出会いの記憶にも結び付けられる。

⇒さらに古代から中世の習慣として、裂いた聖体の小さなかけらを教皇が近くの司教たちに（もしくは司教が自分の教区の司祭たちに）届けさせるというものもあった。この習慣は文字通り、キリストの体である教会が、聖体としてのキリストの体によって一致するよようにという願いから来ている。

④【聖体拝領前の信仰告白】

⇒黙示録 19 章の、終末論的な子羊の婚宴のモチーフ。私たちはこの食事に招かれて「幸い！」と本当に思っているだろうか？

⇒ここで会衆が答える百人隊長の言葉（マタイ 8:8）は決して「自分を卑下する」ものではなく、心からの信頼の言葉。しかも、私たちの「ふさわしくない」状態にもかかわらず、結局キリストは「わたしの家」の内に来てくださる。

⇒聖体拝領によって、「わたしの心」もそして「わたしたちの共同体」も「神の家」へと変容する。

⑤【拝領の歌／拝領唱】

⇒拝領の歌はただの雰囲気づくりの BGM ではない。

⇒古代のローマ典礼において会衆による聖歌は主に「行列」と関連付けられていた（入祭、福音書を迎えるアレルヤ唱、奉納、聖体拝領）。この中で現在でも実際に会衆が行列できるのが聖体拝領。

⇒聖体拝領の行列は単なる「順番待ち」ではなく、キリストと共に歩む神の民の姿であり、同時に神の国が到来した時の「天のエルサレムでの凱進行列」の先取りでもある。（ローマのバジリカ建築の後陣のモザイクに好まれるモチーフのひとつ。）だからこそ心をひとつにしなが、喜びのうちに神を賛美して「歌う」。

⑥【聖体拝領】

◇「キリストの御からだ」という司祭に対する呼びかけに「アーメン」と答える意味。

⇒「アーメン」とは通常、「その通りである」という承認、もしくは「そうでありますように」という願いの両方の意味がある

承認：いま受けようとしているホスチアが、まさにキリストの聖体であるという信仰告白。

⇒では聖体拝領の時の「アーメン」には、「願望」の意味もあるのか？

◇聖アウグスティヌスによる聖体拝領時の「アーメン」の解釈

「(神の祭壇に置かれた)パンはキリストの体であり、聖杯はキリストの血です。〔…〕キリストの体を理解したい場合は、信者に語る使徒(パウロ)の言葉に耳を傾けてください。「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(一コリント 12:27)。したがって、もしあなたがキリストの体とその部分であるなら、主の食卓に置かれているものはあなた自身の神秘でもあります。あなたは、あなた自身の神秘を受け取ります。あなたという存在に対して、あなたは『アーメン』と応答し、このように答えることによって、それを承認して受け入れます。あなたは『キリストの御からだ』と聞き、『アーメン』と答えます。あなたの『アーメン』という答えが本物となるよう、キリストの体の一員となりましょう。

では、このようなことがなぜパンに起こるのでしょうか?〔…〕もう一度、使徒(パウロ)が聖餐について語っている言葉に耳を傾けてみましょう。『パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。』(一コリント 10:17) 一致、真理、信仰深さ、そして愛徳を理解し、楽しみましょう。〔…〕多くの穀物が一つのパンに集められているように、(あなたがた)信者も(キリストの体として)神に対して一つの魂と一つの心を持っているかのようなのです。」

(アウグスティヌス説教 272、私訳。)

⑦【聖体拝領後の沈黙】

⇒感謝のうちに、「アーメン」と答えながら受け取った聖体によって、自分と共同体が「神の家」として変容していくために必要な、神を礼拝し、神とつながる大切な時間。

「会衆全体に属する儀式行為の中で、沈黙は絶対的な重要性をもっています。〔…〕こうした沈黙は、まるで気をそらせるものであるかのように儀式を二の次にして、ある種の孤独の中に身を隠すための内なる避難所ではありません。〔…〕典礼的な沈黙とは、祭儀の行為全体にいのちを吹き込む聖霊の現存と働きの象徴なのです。〔…〕沈黙はわたしたちを、キリストの御からだと御血への礼拝へと向かわせます。親しい交わりの中で、裂かれた聖体のパンとわたしたちを一つにするために、聖霊がわたしたちの生活に何をもたらすかを、沈黙は暗示しているのです。〔…〕沈黙を通して、聖霊はわたしたちを磨き、形づくります。」(教皇フランシスコ使徒的書簡『わたしはせつに願っていた』52項。)

⑧【拝領祈願】

聖体による「キリストとの交わり」そしてキリストにおける「共同体の交わり」を感謝し、その恵みが私たちの日常生活および教会の歩みの中で実現していくよう神に祈る。

⇒J.A.ユングマンによれば、中世以降、信者の聖体拝領が少なくなり、ミサがまるで司祭個人の祭儀だと誤解される危険があった時代においてさえ、この拝領祈願は常に「共同体」を意識した内容であった。まさに、神の家に集められた共同体・家族としての祈り。

「いのちの源である神よ、愛の霊をわたしたちの心に注いでください。同じ一つのパンで養われたわたしたちが、一つの信仰と愛に結ばれて生きることができるよう。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」(1月19日、C年・年間第2主日の拝領祈願)